

修士論文(要旨)

2012年1月

学部留学生のアカデミック場面における学びと変容に関する研究  
ーコミュニティ参加過程に着目してー

指導 宮副ウォン裕子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

210J3010

崔佳英

## 目次

<b>第1章 はじめに</b> .....	1
1.1 研究背景 .....	1
1.2 研究目的 .....	2
1.3 用語の定義 .....	2
<b>第2章 先行研究</b> .....	3
2.1 アカデミック場面に関する先行研究の概観 .....	3
2.2 本研究の位置づけ .....	6
<b>第3章 調査概要</b> .....	7
3.1 調査方法 .....	7
3.2 調査対象者 .....	7
3.3 分析方法 .....	7
<b>第4章 概念カテゴリーからの分析</b> .....	9
4.1 大学生活への期待と不安 .....	9
4.2 学習関連活動 .....	10
4.3 生活関連活動 .....	15
4.4 異文化接触 .....	17
4.5 大学生活に対する自己評価 .....	19
<b>第5章 概念カテゴリーからみる考察</b> .....	23
5.1 大学生活への期待と不安 .....	23
5.2 学習関連活動 .....	24
5.3 生活関連活動 .....	28
5.4 異文化接触 .....	30
5.5 大学生活に対する自己評価 .....	33
<b>第6章 総合的考察</b> .....	38
6.1 入学当初の戸惑いから変容へ .....	38
6.2 コミュニティ参加を通じた学びと変容 .....	40
<b>第7章 おわりに</b> .....	43
7.1 本研究のまとめ .....	43
7.2 留学生へのアドバイス .....	44
7.3 留学生受け入れ大学への提言 .....	45
7.4 今後の課題 .....	46
参考文献	
巻末資料	

学部留学生のアカデミック場面における学びと変容に関する研究  
ーコミュニティ参加過程に着目してー

近年、国際化が進む日本の大学において、多様な言語・文化を背景とする学部留学生が増える傾向にある。そのため、大学生活の中で学部留学生が、他の留学生や日本人学生たちとともに参加するさまざまな接触場面は、多言語・多文化的な性格を強めていると推測される。このような接触場面では、彼らは有意義な学びを体験する一方で、様々な困難や課題にも直面すると考えられる。

彼らのアカデミック生活を支援するための実証的研究の重要性が高まる中、本研究では、多様な社会文化・言語の背景をもつ留学生の、アカデミック場面での各種コミュニティへの参加過程及び変容を解明することを目的とする。具体的には、学部留学生がどのようなアカデミック場面に参加しているのか、どのように行動しているのか、そして、そこで求められる課題の達成には、どのような行動や、日本語能力、日本語能力以外の技能が必要とされているのか、などである。これらの研究課題の解明により、学部留学生のアカデミック能力の向上に役立つ提案ができるのではないかと考える。

まず、アカデミック場面に関する実証的な研究を行った文献を概観し、現状と困難点、インターアクション能力、学びとその変容という3つの観点から考察を行った。現状と困難点に関する研究は、学部留学生の日本語習得状況や課題(黒野 2006, 因 2003, 長野・峯 2005 など)について明らかにしている。一方、インターアクション能力に関する研究では、宮崎・麻生(2007)、池田(2004)が、アカデミック場面における言語能力以外のインターアクション能力の重要性について主張した。学びとその変容に関しては、三代(2008)、八若(2008)などがあり、学部留学生の日本社会・コミュニティへの参加及び変容のプロセスは、彼らにとって学びにつながる体験であると述べている。以上の先行研究の概観の結果、現状と困難点に関する研究においては、学部留学生の言語能力に着目した研究がほとんどであることがわかった。また、インターアクションに関する先行研究では、ある特定の場面に限定し調査を行った研究が多く、大学内における総合的なアカデミック場面に密着した実証的な研究が不足していることが明らかになった。

また、大学院生(李 2010)と学部留学生のアカデミック環境の違いについて言及し、本研究の立場を明らかにした。先行研究を踏まえ、本研究では、学部留学生のアカデミック場面での参加過程における学びと変容に関する調査を行った。

本研究では、学部留学生を対象に、1人あたり約40分から1時間程度、半構造化インタビューを行った。調査対象者は、日本の大学3、4年に在籍する韓国人留学生、計8名である。分析方法は、インタビューから得られたデータを文字化し、質的データとして扱った。データは佐藤(2008)の質的データ分析法を用い、分析を行った。

分析の結果、上位の概念カテゴリー11項目が抽出された。さらに、上位の概念カテゴリーには下位の概念カテゴリーとして分類されるものもある。なお、同類のもの別に、「大学生活への期待と不安」、「学習関連活動」、「生活関連活動」、「異文化接触」、「大学生活に対する自己評価」という5つの節に分類し、各節ごとに、各概念カテゴリーに属するコードの詳細について述べた。

そして、各概念カテゴリーについての考察を行った。「大学生活への期待と不安」については、学部留学生にとって日本人との交流が、期待の半面、不安要素にもなっていることが特徴として挙げられた。また、「学習関連活動」については、授業、試験・レポート、発表・プレゼンテーション、ゼミ

といったアカデミック場面における様々な困難や課題に直面していることがわかった。その一方で、それぞれ自分の学習環境に見合った戦略を使用しつつ、課題を解決していることが明らかになった。「生活関連活動」に関しては、主に、日本人との関係構築上の困難さや不慣れた環境への適応に関する課題が浮き彫りとなった。また、ほとんどの対象者が学内の国際交流会への参加を通し、様々な学びや気づきを体験していることがわかった。「異文化接触」では、困難・葛藤を経て、異文化の理解へと成長する姿が見られた。一方、異文化接触での困難に直面し、アイデンティティの揺らぎや日本人・日本社会に対する閉鎖的な態度などの葛藤の様子も伺えた。「大学生活に対する自己評価」においては、肯定的・否定的側面のいずれも確認された。肯定的な評価としては、AI能力の向上やコミュニケーション能力の向上などが挙げられ、否定的な評価としては、主に対人関係やプレゼンテーション・スキルが挙げられた。

各概念カテゴリーからの考察の結果、学部留学生は、学内の各種コミュニティへの参加を通して学びや発見を体験し、意識や行動に大きく影響を受けていることがわかった。彼らにとって、日本の大学は、異文化環境であり、そこでのアカデミック生活を通し、異文化受容・理解の肯定的意識や見方の拡大または、他者とのコミュニケーションの取り方や関わり方などの学びを体験するのである。さらに、言語能力や学術的知識、学習戦略、人的ネットワークなど実際のアカデミック場面で必要とされる能力を獲得していくことが明らかになった。以上のことから、コミュニティへの参加は彼らにとって、アカデミック生活を支援するために有意義であることが検証された。

本研究の結果から、日本で学ぶ留学生及び留学生受け入れ大学に対し、以下のような提案ができると考える。まず学部留学生を支援する大学側には、留学生と日本人が共に学ぶ環境づくりが求められる。そのため、留学生と日本人が相互理解を深められるように、交流の活性化を図る場の提供が急務である。さらに、講義やゼミの体制といった既存の制度の再検討を通し、彼らが主体的かつ自律的に取り組める学習活動を視野に入れたさらなる支援が必要となる。一方、学部留学生には、自発的・積極的なコミュニティ参加や異文化に対する寛容性や柔軟な思考力などが求められる。

学部留学生に対してのより充実した支援を行うために、今後はさらなる実証的な研究が求められる。

## 【参考文献】

- 浅井亜紀子(2006)『異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ』ミネルヴァ書房
- 麻生貴美(2004)「講義場面における留学生のインターアクション問題に対する調整行動ー非言語行動としての頭部動作を中心にー」『早稲田大学日本語教育研究』5,19-44
- 麻生貴美・宮崎里司(2007)「アカデミック接触場面におけるインターアクション行動分析ーアイカメラを使った視線の軌跡検証による新たな方法論の試みー」『早稲田大学日本語教育研究』10,1-15
- 池田佳子(2004)「インターアクション言語運用能力の向上を目指してーインタビューという言語運用向上を目指してー」『ICU 日本語教育研究』1,45-58
- 因京子(2003)「学部留学生の学習活動の現状と意識ー九州大学の場合」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』,科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果中間報告書,63-72
- 薄井博美(2007)「接触場面の参加者の役割から見る社会文化能力の習得:インターアクション場面のケーススタディから」『千葉大学日本文化論叢』8,31-48,千葉大学文学部日本文化学会
- 門倉正美(2006)「〈学びとコミュニケーション〉の日本語力ーアカデミック・ジャパニーズからの発信ー」門倉正美・筒井洋一・三宅和子[編著]『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房,3-20
- 神谷順子・中川かず子(2007)「異文化接触による相互の意識変容に関する研究ー留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果ー」『北海学園大学学園論集』134,1-17
- 久保田賢一(2000)『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』関西大学出版部
- 倉地暁美(2006)「カルチャー・ステレオタイプの脱却ー日本語を教える大学教師のマイクロ・エスノグラフィー」『広島大学高等教育研究開発センター大学論集』37,149-165
- 黒野敦子(2006)「学部留学生の日本語使用の実態ー質問紙調査とインタビュー調査から明らかになったことー」『筑波大学紀要』1,195-206
- 佐藤郁也(2008)『質的データ分析法』新曜社
- 重田美咲(2008)「工学系大学院留学生の「正統的周辺参加」と日本語学習」『広島大学大学院教育研究科紀要』2,255-262,文化教育開発関連領域 57
- 館岡洋子(2002)「日本語でのアカデミック・スキルの養成と自律学習」『東洋大学紀要 留学生教育センター』22,1-20
- 長野ゆり・峯正志(2005)「金沢大学で学ぶ学部留学生の学習上の問題点」に関する聞き取り調査」
- 日本学生支援機構(2011)「平成23年度外国人留学生在籍状況調査結果:留学生受け入れ概況 6.在学段階別・国公立別留学生数」
- ネウストプニーJ.V.(2003)「アカデミック・インターアクションの理解にむけて」『日本留学生試験とアカデミック・ジャパニーズ』平成14年度～16年度 科学研究費補助金基盤研究費(A)研究成果中間報告書,139-15
- 八若壽美子(2007)「韓国人学部留学生の日本語学習における自己評価の変容」『茨城大学留学生センター紀要』5,41-52
- 花見楨子(2006)「留学生と日本人学生の合同授業の創出」『三重大学国際交流センター紀要』8
- 堀井恵子(2006)「留学生初年次(日本語)教育のデザインする」門倉正美・筒井洋一・三宅和子[編著]『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房,67-78
- マリオット・ヘレン(2005)/宮崎七湖[訳]「日本人留学生のアカデミック英語能力の発達」『日本語学』24(3),86-97

- 三代順平(2008)「コミュニティへの参加の実感という日本語の学びー韓国人留学生のライフストーリー調査からー」『早稲田日本語教育学』6
- 宮崎七湖(2008)「大学院留学生の文章課題遂行過程における文章モデル使用の実態」『言語文化と日本語教育』36,1-10
- 吉川友子(2009)「異文化間交流」の実際ー対日留学生と日本人の相互行為分析からー」野宮香代子・山下仁[編著]『新装版「正しさ」への問いー批判的社会言語学の試みー』三元社, 183-214
- 李麗麗(2011)「中国人大学院生のアカデミック・インターアクションに関する研究ー正統的周辺参加から十全的参加への過程の分析と考察ー」『桜美林言語教育論業』7,17-31